

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第155集

牛寺遺跡

2008

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

序

牛寺遺跡の所在する豊田市は、自動車産業では世界をリードする「モノづくり愛知」を代表する都市です。

発掘調査により、縄文時代と弥生時代の建物跡、中世の居館跡などを確認し、豊田市域の集落研究に寄与する成果をあげることができました。

これらの調査成果を本書に掲載することが、地域誌研究の一翼を担い、多くの方々に活用され、ひいては埋蔵文化財保護に寄与することを願ってやみません。

最後になりましたが、牛寺遺跡の発掘調査を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮賜り、関係者および関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して厚く御礼申し上げる次第です。

平成 20 年 3 月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 林 良三

例言

1. 本書は、愛知県豊田市御立町に所在する牛寺遺跡（県遺跡番号 630359）の発掘調査報告書である。
2. 牛寺遺跡の発掘調査は、矢作川野見地区改修事業にかかる事前調査として国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査期間と調査面積は、平成 17 年 6 月～7 月、1,300 m²である。
4. 調査担当者は、小澤一弘（主査）、鶴岡雅弘（調査研究員）、永井宏幸（調査研究員）である。
5. 発掘調査にあたっては、愛知県埋蔵文化財センター運営協議会委員、同専門委員ならびに次の各関係機関の御指導とご協力を得た。（順不同）
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所・同岡崎出張所・豊田市教育委員会文化財課・矢作川沿岸水質保全対策協議会
6. 発掘調査において、ティケイトレード株式会社より、発掘調査業務の支援を受けた。支援体制は以下の通りである。
前田卓宏（現場代理人） 大浜良介（調査補助員） 伊藤陽篠（土木測量技師）
7. 発掘調査および本書の作成において、次の方々のご教示、ご協力賜った。（敬称略・順不同）
岩野見司 江崎武 囲本直久 長田友也 金子健一 河合君近 繁綱茂 杉浦裕幸 松澤和人
森泰通
8. 報告書作成にかかる整理業務において、次の方々、関係機関の助力を得た。
伊藤ますみ 斎藤佳美 中村たかみ 服部里美 三浦里美 山田有美子
なお、遺物実測図作成の一部とトレース業務全般を株式会社アイシン精機に委託した。
9. 本書の執筆および編集は永井宏幸が担当した。本報告の理解をより深めるため、豊田市教育委員会による牛寺遺跡発掘調査（1991 年）の記録を森泰通氏に執筆いただいた。本書に掲載した遺跡写真は鶴岡雅弘および大浜良介が撮影したデジタル写真を用いた。出土遺物の写真撮影は永井が担当し、デジタル写真を用いた。なお、遺跡写真は 6 × 7 判リバーサルフィルムの撮影を大浜が行い、記録写真として保管している。
10. 発掘調査および本書で用いた方位は、国土座標第 VII 系、基準高は東京湾平均海面（T.P.）に基づく。ただし、表記は「世界測地系」とした。
11. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いた番号を用いた。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
SB、建物 SD、溝 SK、土坑 P、ピット（小土坑）
12. 本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著）を参考に記述した。
13. 発掘調査の記録（実測図・写真など）は財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
14. 出土遺物（本書付属 CD-ROM に保管番号・登録番号対照表を収録）は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

1 調査の概要

- (1) 発掘調査の経過
- (2) 遺跡の位置と環境

2 調査の成果

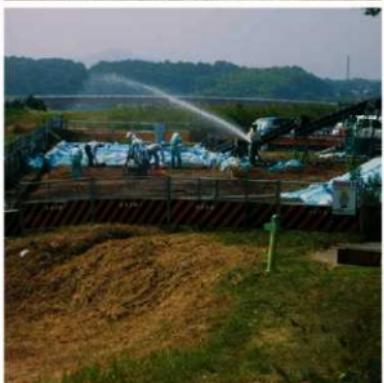
- (1) 概要
- (2) 縄文時代の遺構と遺物
- (3) 弥生時代の遺構と遺物
- (4) 古代の遺構と遺物
- (5) 中世の遺構と遺物

3 総括

付載 豊田市教育委員会 1991 年発掘調査取録

写真図版

発掘調査の風景



上：調査前

中：遺構検出

下：遺構掘削

上：試掘調査

中：調査遠景

下：調査後



図1 豊田市の位置

1 調査の概要

1. 発掘調査の経過

牛寺遺跡は、北緯35度04分25秒、東経137度10分17秒、標高39m前後（現況）、豊田市御立町に所在する。遺跡周辺の現況は、矢作川左岸の段丘低位面、調査区は堤防用地内にある。

今回の調査は、矢作川野見地区回収事業に先立つ事前調査である。本遺跡は、周知の遺跡

調査の経過

として隣接する地点を過去2回発掘調査が行われている^①。国土交通省農橋河川事務所から愛

知県教育委員会による調査。
(1973年・1991年)

発掘調査の手続き

16埋セ第114号	2005年3月14日	埋蔵文化財発掘調査の届出
16教生第2156号	2005年3月23日	埋蔵文化財の発掘について（通知）
17埋セ第34号	2005年8月2日	発掘調査終了の届出 埋蔵文化財保管証
17埋セ第34号	2005年8月2日	埋蔵物発見届
豊教財第592号	2005年9月30日	出土品鑑査結果について（通知）

2003年11月と2004年1月に実施された愛知県教育委員会による遺跡範囲確認調査の結果を受け、調査対象範囲が決定された。調査面積は1,300m²である。



調査区は「河川法」による「河川域」および「河川保全域」に相当する範囲を含んでいた。そのため、国土交通省中部地方整備局に許可申請が必要となった。許可書（国部製農占第3-4号／平成17年5月27日付）は河川法第27条第1項及び第55条第1項の規定に基づき許可された。

発掘作業の経過

発掘調査は、平成17年6月から7月にかけて実施した。遺跡確認調査から表土が20cm前後。重機による表土掘削前に、調査区沿いにトレッソ掘削を行い、包含層の有無と基盤層の確認をした。調査区南寄りに大溝を確認、北側は地形に沿って基盤層が緩やかに傾斜し、低くなることがわかった。包含層は北寄りに存在せず、南寄りも耕作などによる削平が進み、基盤層直上にわずかに残る程度であった。しかたがって、重機による表土掘削は南寄りを慎重に進め、北側は基盤層直上まで一気に下げた。遺構検出の結果、中世期の大溝を中心に、遺構は展開し、北寄りに縄文中期および弥生後期の遺構がわずかに認められた。遺構掘削と併行して、測量と写真撮影などを随時進め、調査は終了した。遺物洗浄は調査期間中に終了した。調査担当者は、鶴飼雅弘（調査研究員／当時）と永井宏幸（調査研究員）で、小澤一弘（主査）が工程管理を行った。発掘調査業務はティケイトレード株式会社より支援を受けた。

整理等作業の経過

室内整理作業は平成18年度に実施した。遺物の選別・接合後、遺物実測作業を行った。遺物の実測およびトレース業務を一部、アイシン精機株式会社に業務委託した。その他、遺構図面整理・原稿執筆・報告書編集作業を随時行い、完了した。室内整理は主に永井が行った。

2. 遺跡の位置と環境

ここでは、牛寺遺跡の前後約1kmについて、豊田スタジアムの辺りから矢作川左岸域を下って概観する。

寺部城跡および勧学院文護寺跡は豊田スタジアムから北方約400m低位段丘面（籠川面）にある。昭和54（1979）年に寺部城跡の調査、昭和58（1983）年に勧学院文護寺跡の調査が豊田市教育委員会により行われた（豊田市教委2006）。調査の結果、大きく4つの成果をあげている。縄文時代については、後期から晩期の埋設土器を伴う墓壙3基をはじめ多数の土坑が確認されている。古代については、勧学院文護寺跡関連の布目瓦などを含む8世紀後半から9世紀前半の須恵器が多く出土している。遺構は確認できなかったものの、現隨應院周辺に勧学院文護寺の存在が明らかになった。中世寺部城については、16世紀を中心とした遺物が多く、調査区が二の郭部分に相当することがわかった。近世寺部陣屋については、18世紀後半～19世紀の遺物が多く、二の郭内の蔵および内堀部分に相当し、廃棄土坑などが見つかっている（前掲2006）。

縄文時代中期後半の堅穴住居が確認されている曾根遺跡は豊田スタジアムに隣接する段丘上に立地する。曾根遺跡を矢作川沿いに南下すると古城遺跡がある。平成12年度に発掘調査が実施され、古代から中世にかけての遺構・遺物が確認された（豊田市教委2004）。

牛寺遺跡および牛寺廢寺は古城遺跡の南端から河岸段丘を上がった所に位置する。矢作川の対岸には伝「鐵田信長像（狩野元秀画）」を所蔵する長興寺[※]がある。

牛寺遺跡を約300m南下すると、河川敷が狭くなる。丘陵に切り込む。狭い川幅を利用し、2つの橋「竜宮橋と鶴の頸橋」が架かる。ちょうど鶴の長い首のように屈曲しながら約400mにわたり川幅が狭い。鶴の頸橋の付近には丸根城跡と丸根遺跡がある。1989～90年発掘調査が行われている。そして式内社野見神社が鎮座する野見山の頂には展望台がある。ここから矢作川を上流に向かって眺望すると、上記の遺跡が一望できる。

※長興寺（ちょうこうじ）は臨済宗東福寺派の別格寺。山号は集雲山（しゅううんざん）。正式な寺号は長興禪寺。開山は太陽義沖。



曾根遺跡と豊田スタジアム



八桂社直譯

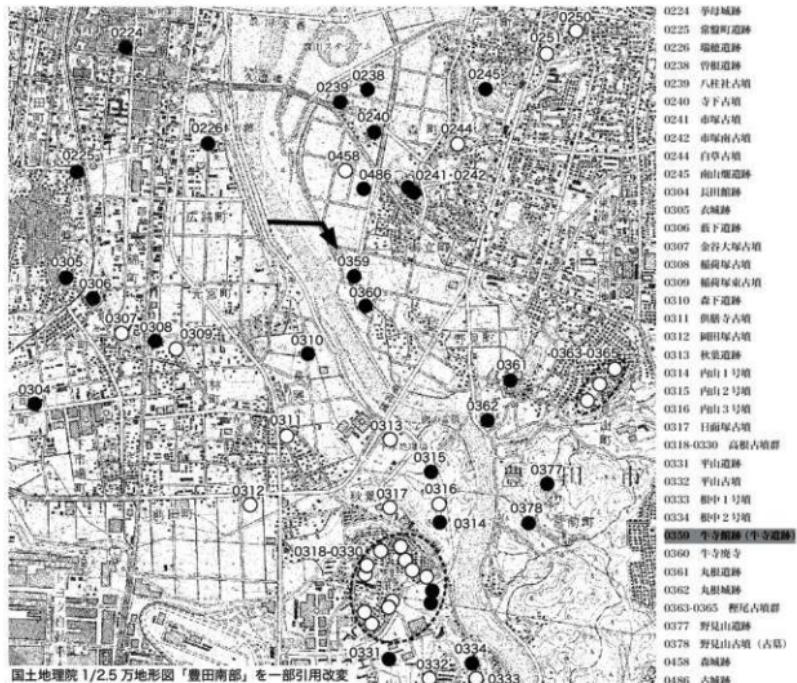


図2 生寺遺跡と關辺の遺跡位置図



再現寺本堂



野見山展望台より矢作川（鶴の首橋周辺）を望む

2 調査の成果

1 概要

調査の成果としては、大きく3つある。まず、牛寺廃寺以前の遺構・遺物を確認したこと。縄文時代中期後半の土器敷炉（SK06）と弥生時代後期の建物（SB01）を確認した。次に、古代牛寺廃寺関連の遺構・遺物がほとんど確認できなかつたこと。最後に、牛寺館跡関連、1991年調査に関連する遺構群を確認したこと。

縄文時代中期後半の土器敷炉（SK06）は、当初単独遺構として認識していた。その後、遺構埋土の状態と遺構の配置から、2ヶ所のピットを同一時期と推定した。その結果、西側調査区外へ続く建物（SB02）に伴う炉跡であるとした。

弥生時代後期の建物（SB01）は、調査区東壁トレント掘削時に壁溝を確認、調査開始当初からその存在を注目していた。しかし、中世の溝と土坑による削平などから全容が把握できなかつた。そして壁溝の残存状況を手がかりに、プランを探った。その結果、6m四方の方形プランとなる竪穴建物を確認した。中世の土坑（SK01）と重複し、明確な炉跡は確認できなかつた。

古代の遺構については、根石をもつ土坑が2ヶ所あり、中世の遺構群とその重複関係からその存在を推定した。SK03a～dとSK04がこれにあたる。遺物が伴わないので確定できないが、付近から須恵器など古代関連資料は出土している。

中世の遺構は、今回の中心となる遺構群である。豊田市教育委員会の調査（1991年）と関連する遺構群は、溝とこれに並行する柵列である。今回の調査で確認した遺構群は大きく



溝2条とその間のピット群、土坑からなる。調査区東寄りの溝（SD01）は、再掘削が確認できた。一方、調査区中央を縦断する溝（SD02）は、川原石による石列が部分的に残存していた。溝間のピット群は、農田市1991年調査のように、整然と列をなすものではなかった。ただし、発掘調査時あるいは図面上で多少の蛇行はあるものの、柵列を想定できる箇所があった。

2 縄文時代中期の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、柱穴2ヶ所と土器敷炉（SK06）からなる竪穴建物（SB02）のみである。遺物についても、土器敷炉に伴う土器と打製石斧のみで、包含層を含めて他の地点からの出土は無い。ここでは、土器敷炉[※]を中心に報告する。

SK06は2つの土坑が重なっている。SK06aとSK06bとして記述をする。

SK06aは73×68cmの梢円形、深さ19cm皿状の断面形である。土器の出土状態としては、2層にわたり土器片が並べてある。概ね土坑の底面最深部からSK06bと重複する東寄りに集中する。上面観は細長い台形。東よりは土坑の壁に沿って立ち上がる。つまり、底面から側面に土器を貼り付けている。土器は2次的な被熱のため、もろい。土器を取り除いた直下は被熱した箇所が広がっていた。

出土した土器は1個体ではない。接合した結果、3個体以上判明したが、検出した時点で隣り合う土器片が異なっていたため、図化資料もあえて個体識別しなかった。1～17すべての土器はSK06aからの出土である。すべて縄文時代中期後半の神明式に相当する。1のように貼り付け突堤（隆帶）の区画内に刺突紋や沈線紋がない資料を含むので、神明式でも古い段階と考えられる。沈線区画内に縄紋を施すものとして、3～6・9・10・12～14がある。すべて単節のRL。

SK06bは西側をSK06aと重複し欠損、さらに東側もSD06と重複し欠損、南側の一部が残存していた。推定の大きさは、85×65cmの梢円形、深さ19cm皿状の断面形である。SK06aより一回り大きい。土器はなく、替わりに打製石斧（S-1：凝灰岩）を含め5点の10cm前後の川原石が底面から少し離れた位置に出土した。覆土のうち2層に焼土塊と炭化粒が多く含まれていたものの、土坑の底面および壁面に被熱痕はあまり見られなかった。

竪穴建物の平面形は捉えられなかつたが、土色・土質と^トとの位置関係などから、P35とP106の2カ所を柱穴と想定した。

[※] 2006年に遺跡公園整備のため再調査した骨格遺跡の竪穴建物（神明式）も土器敷炉が確認されているという。（長田友也氏ご教示）



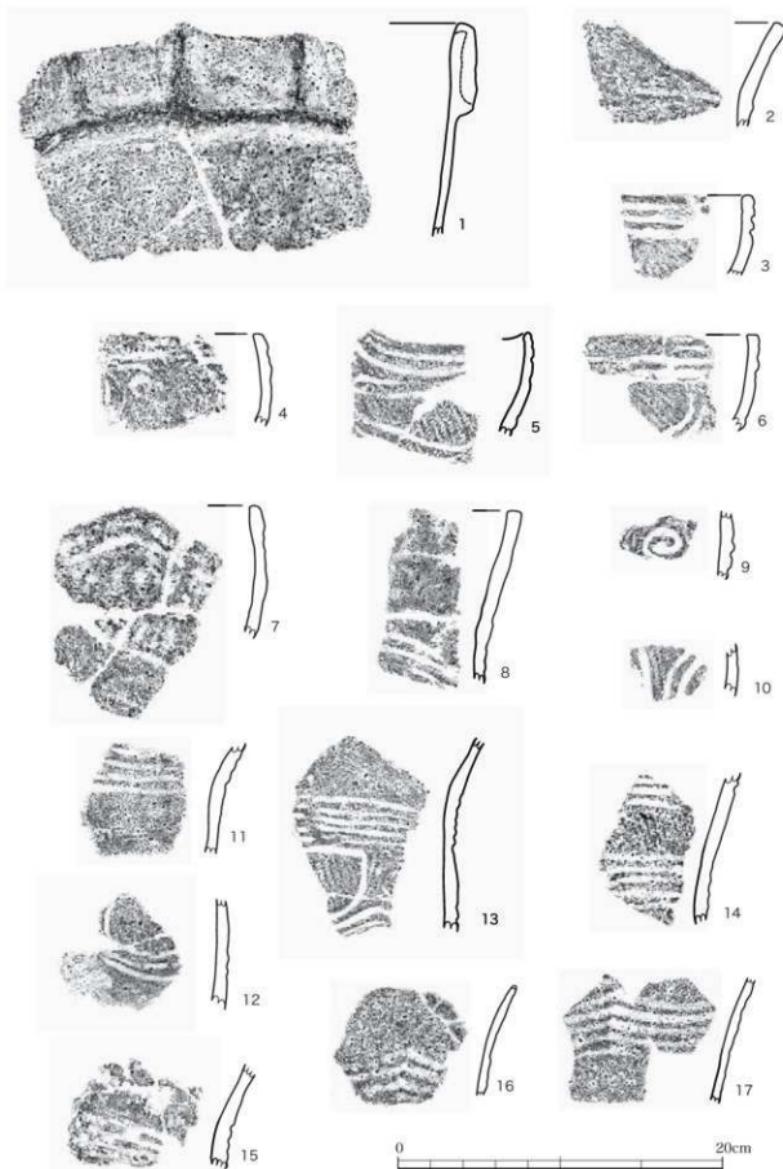


図4 繩文時代中期の遺物 (SK06) S = 1/3

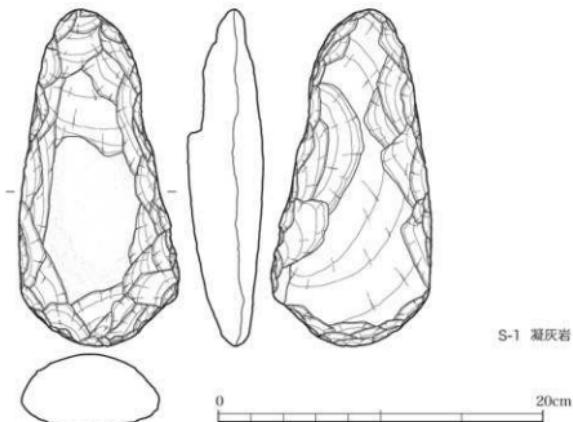


図5 摺文時代中期の遺物 (SK06b) S = 1/3

3 弥生時代後期の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴建物 (SB01) に関連する遺構のみである。

SB01は、調査開始まもなく認識できた。調査区東壁のトレンチを掘削中に、壁溝 (SD05) が調査区壁面で確認したからである。比較的容易に平面プランも確認できると考えていた。ところが、遺構検出を進めていくと、中世の遺構群に削平を受け、平面形がほとんど認識できなかった。中世の遺構を検出・掘削を進めるなかで、埋土の異なる溝とピットが確認できた。最終的には調査区壁の壁溝を基点に探った。

SD07はほぼ東西方向にのびる。東側は中世の溝 (SD04) に削平され、西側は調査区手前で途切れる。SD04の東側にSD07は検出できなかった。調査区東壁に竪穴建物の断面を確認した。SD07に相当する壁溝の断面は認められなかった。したがって、SD07はSD04の辺りで途切れ、調査区東壁までは延びない。幅30cm前後、深さ5cm前後を測る。

SD05はSD07にほぼ平行している。調査区東壁と接する辺りで北方向に屈曲する。一方、西方向はP83・P86と重複する付近で北方向に屈曲する「L」字状の溝がある。当初はSD05として捉えていた。覆土から中世陶器が出土したこと、覆土の土色・土質が異なっていたこと、P83・P86と重複する付近を精査した結果、切り合い関係が認められた。以上のことから、別遺構として判断した。

南北方向の壁溝は確認できなかった。東側はちょうど調査区外に、西側は調査区内に推定できるが、調査区壁に沿ったトレンチの中か、あるいは削平されている可能性もある。以上のSB01に関連する壁溝としたSD05とSD07から推定すると、6m四方のほぼ正方形プランの竪穴建物である。

その他、プランのほぼ中心部分に、焼土と炭化物、最大長30cm前後の川原石が3点付つていた。当初、中世の土坑SK01に伴う資料と比定した。ところが、SK01の南東隅に偏つて出土した川原石および焼土などを中世より古い遺構の混入として考えた。そうすると、



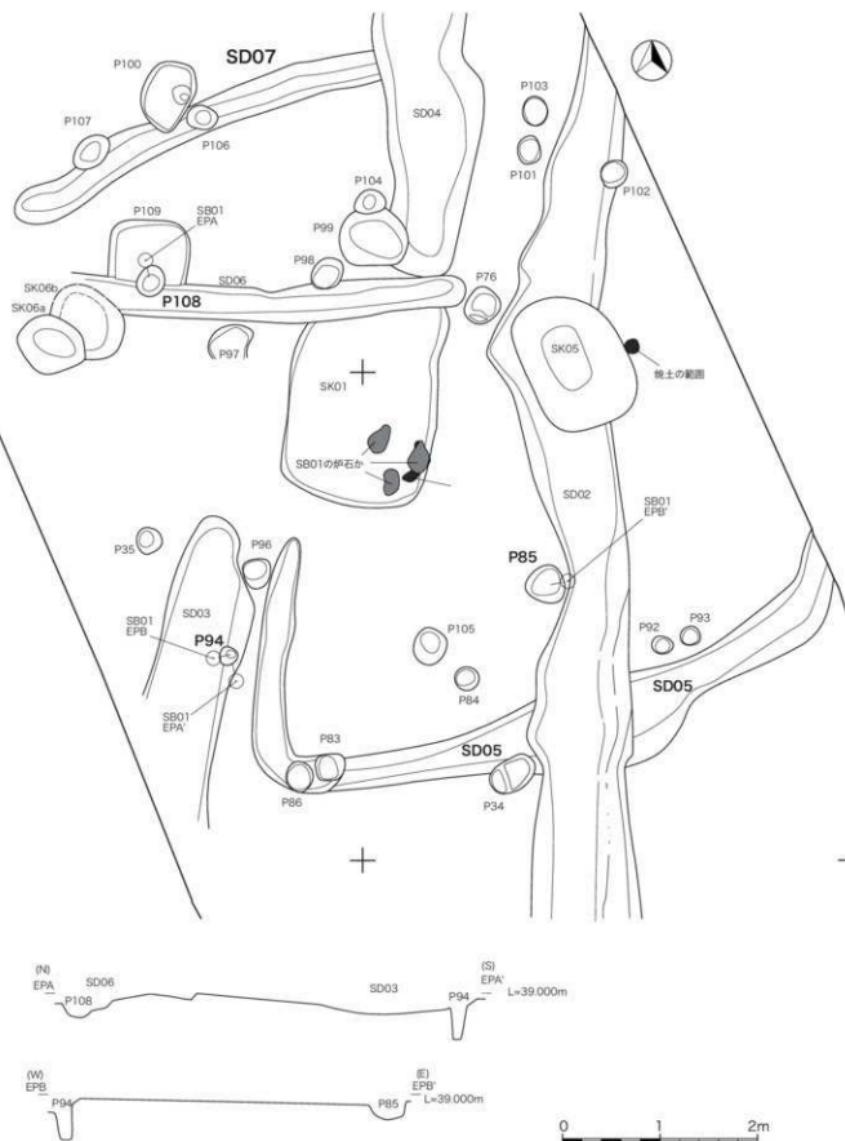


図6 SB01 平面図・断面図および主柱穴エレベーション図 (S=1/50)

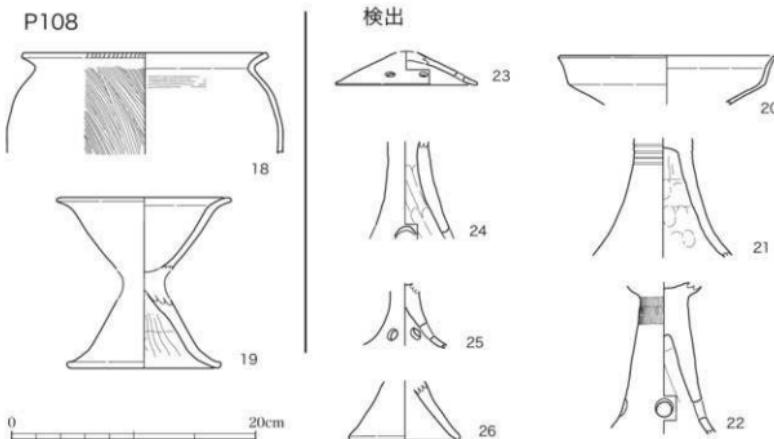


図7 弥生時代の遺物 (S=1/4)

SK01に広がる焼土・炭化物はほぼ中央部分と南東隅の2ヶ所に分かれていること、後者の焼土・炭化物の位置がSB01のほぼ中央に位置することがわかった。つまり、SK01はSB01の炉を削平して構築されたと推定するにいたった。

主柱穴は、プランとの位置関係とピットの土質などから、P85・94・108の3ヶ所を比定した。4本の主柱穴と想定できるが、もう1ヶ所は比定できなかった。これら3ヶ所のうち、土器資料を作ったP108から2点出土している。

図7の18・19は弥生時代の遺構に伴う資料である。他の資料も多少の時期差はあるものの、竪穴建物周辺から出土している。

18は甕。内面のケズリは摩滅により不明。口縁端部のキザミ、外面のハケ調整はかろうじて観察できた。19は高杯あるいは器台であろうか。ちょうど杯部と脚部の接合面が不明。全面に被熱痕が見られた。20は杯部に稜をもつ高杯。外面に波状紋は見られなかった。21・22は高杯の脚部。21は上位に沈線3条、22は櫛齒状工具による連続刺突を施す。23は蓋。2孔1対の焼成前穿孔を持つ。24～26は高杯の脚。24・25は透穴をもつ。24は21と22のように細長い長脚。一方、25・26は低脚で袖部が開くタイプ。

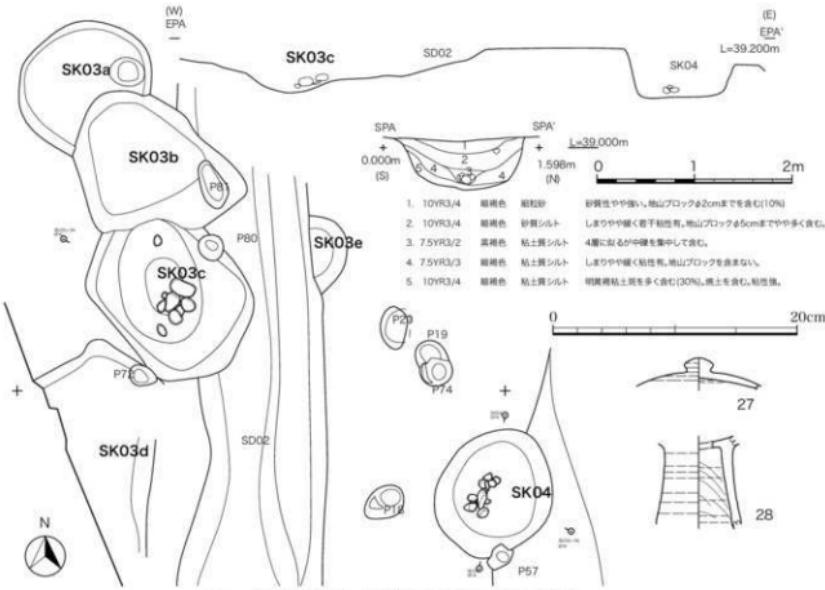
18～24までは概ね弥生後期の川原上層II式(山中式併行)、25・26は弥生終末期の川原上層III式(廻間I式併行)である⁹。



4 古代の遺構と遺物

1973年調査で明らかになった基壇状遺構を伴う牛寺廃寺関連の遺構群が今回の調査では期待された。牛寺廃寺と今回の調査区は直線距離で南北方向約80m離れている。調査の結果、古代の遺構・遺物については、ほとんど確認できなかった。ただし、注目できる遺構はある。中世の遺構群（SD01・02）と切り合い関係がある土坑が2ヶ所ある。いずれも土坑の下位に20～50cmの礫を10個前後固まって出土している。SK04の断面図で示したように、柱痕の痕跡（3層）すなわち、抜き取り痕とその後人為的に埋めた埋土（1・2層）が見て取れる。各層の説明をもう少し加える。3層は礫が集中する。1・2層は基盤層（地山）が埴土状に混入している。一方、SK03は3つの土坑が重複している。調査の段階で同一の性格の土坑と判断していたので、a～cを付した。切り合い状況よりaからcの順番に掘削されたと判断した。そして最も新しいSK03cに礫が残る。調査途中に断面観察を怠ったため、確定は出来ないが、礫が集中すること、エレベーション図による礫の堆積位置などから同一の機能を推定できる。つまり礫は根石の役割をし、その上の礫石は持ち去られた、大型建物の柱穴を想定したい。SK03と組み合わせて建物を想定すると、SK04に最低2箇所の土坑が隣接していたと予想できる。そうすると、位置関係からSD01掘削時に2ヶ所の土坑は消滅したと考えられる。

古代の遺物としては、図化できる資料が須恵器の蓋（27）と高台盤（28）のみ。いずれも検出資料で、SK03およびSK04からの出土資料はない。





5 中世の遺構と遺物

中世の遺構・遺物は、今回の調査において最も成果を得た。つまり、豊田市教育委員会による1991年調査と遺構の配置が類似し、同時期の遺物が出土していることから、隣接した調査成果を合わせて評価できる。

まず、今回の調査成果を示し、次に「総括」で1991年調査を比較検討する。その結果、柵列を作った区画溝が想定できた。しかし、柵と溝によって区画した施設内は調査区外であった。したがって、建物の配置を含めて不明な点が多い。遺物資料の提示は、小片資料は底部および口縁部怪の計測できる資料を抽出して図化した。

SD01

SD01はほぼ南北方向に続く溝が、2条重なっていた。断面観察などから、調査区東壁寄りのSD01aが新しく、西寄りのSD01bが古いとした。SD01aは検出面から深さ45cm前後、断面形が一段テラスをもつ逆台形となる。上位の幅約1.7m、下位の幅約60cmを測り、ほぼ南北方向に延びる溝である。一方、SD01bは検出面から深さ55cm前後、SD01aより深く掘り込まれている。溝の西側は緩やかに立ち上がる。溝の東側はSD01aと重複するため立ち上がりは不明。おそらく溝の両肩が相似形をなすので、断面形は底辺の長い逆台形であろう。上位の幅推定4.7m、下位の幅2.2mを測る。溝の最深部中央に炭化物と骨片が50×70cmの範囲で広がる。位置はSD01bの西肩に重複するSK04の東へ約2mである。炭化物および骨片とともに良好な状態ではなく、鑑定できなかった。

出土遺物は、aとbに分けて掘削できなかつたので、同一遺構として提示した。図示した遺物のうち、35と36以外は古瀬戸前期の範疇でおさまる資料群。29～32は土師器皿。33は伊勢型鍋。34は山茶椀。37は古瀬戸前期Ibの水注。38と39は同一個体と思われる古瀬戸前期後半の四耳壺。

SD02

SD02はSD01bの西側に平行する石列を所々に残す溝。SD01bから約3m前後離れて平行する。この間を後述する柵列（ピット列）が埋める。SD02はほぼ南北方向に延びる。概ね北寄りで幅60cm前後、南寄りで幅1.3m前後を測り、南寄りに溝の幅が広がっているよう見て取れる。一方、溝の深度は、北寄りで10cm前後、南寄りで20cm前後であること、基盤層（検出面）は北方向へ低くなる傾向があること、以上2つの理由からむしろ北寄りで南寄りに比べて上位半分が削平されていると判断できる。溝内の石列は、削平を受けたと判断した北寄りにある。断続して拳大の川原石が溝の東肩に沿って1列に並ぶ。溝の深度がある南側には続かない。

柵列

SD01bとSD02の間を多数のピットが埋める。これらのピット群はおよそ径20cm前後、深さは10～30cmで20～25cm前後が最も多い。調査段階で、いくつかのピットが列を構成していると判断した。ここでは、調査時の所見を踏まえて柵列A～Cを提示する。それぞれの柵列は5カ所前後並ぶ。柵列BとCはSD01bと軸線がほぼ同一、柵列Aは若干西寄りに傾く。3つの柵列は同一の軸線になることはないが、概ね前者2つの柵列がSD01bに、後者がSD02に規制されている。また、SD01bの西肩に重複するピット群、さらに東側肩に重複するピット群はSD01bに規制された柵列の可能性が指摘できる。

これらのピットから出土した遺物はほとんどなく、若干中世陶器が覆土に含まれる程度であった。P22出土の（77）は、猿投産の第3型式椀。周辺の遺構出土資料より古い時期の資



09/2010-X

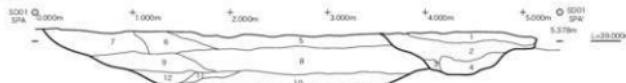
09/2009-X

09/2010-X

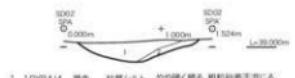
09/2010-X



図9 中世遺構全体図 S=1:100



SD02 断面图

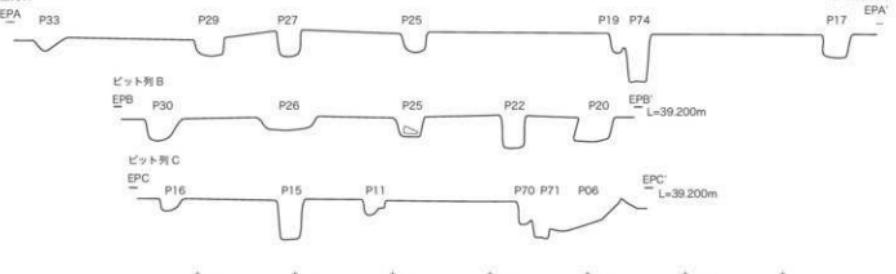


- | | | | | |
|-------------|-----|----------|--|-------|
| 1. 10YR4/4 | 褐色 | 粗粒砂土 | やや硬く崩れ難い粗粒砂土を出す。
西面里付近では山地ブロックをや多く含む。 | S001b |
| 2. 10YR3/3 | 褐褐色 | 粗粒砂 | 粗粒かく conte。炭化粗粒を若干含む。根糸はやや多い。 | |
| | | | | ↓ |
| 5. 10YR4/4 | 褐色 | 粗粒砂 | やや硬く崩れ難い粗粒砂土を出す。 | S001b |
| 6. 7.5YR4/4 | 暗褐色 | 粗粒砂 | 粗粒やや多く含み、5%ほど粘土を含む。 | |
| 7. 7.5VR3/2 | 褐色 | 粗粒砂 | 地山にリコリスを含む(25%) | |
| 8. 10YR4/5 | 褐色 | 粗粒砂 | 地山にブロッキを含む。硬くしり過ぎ無い。
しまりやや悪い。粒径一様でや細。 | |
| | | | | ↓ |
| 9. 7.5YR4/4 | 褐色 | 粗粒砂土・粗粒砂 | 田面にひびきや隙間があり、地山にブロック状に含む(15%) | S001b |
| 10. 10YR3/3 | 褐色 | 粗粒砂土・粗粒砂 | 田面に粗粒砂土を含む。隙間があり、地山にブロック状に含む(15%) | |
| 11. 10YR4/4 | 褐色 | 粗粒砂土・粗粒砂 | 粗粒砂質や細砂、地山に含む。 | |
| 12. 10YR4/4 | 褐色 | 粗粒砂土・粗粒砂 | 粗粒砂質、砂層下に岩盤にや多く含む。地山にブロック層に含む(20%) | |

柵列 A～エレベーション図

四〇六

EPA



静安区南壁而断而废

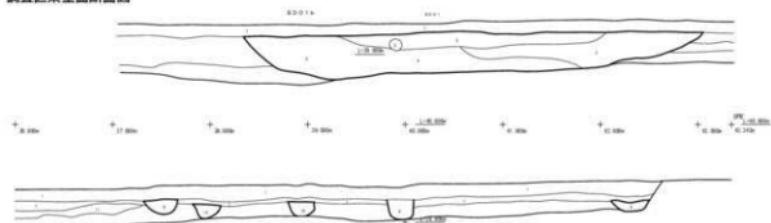


図10 中世遺構断面およびエレベーション図 S=1:50

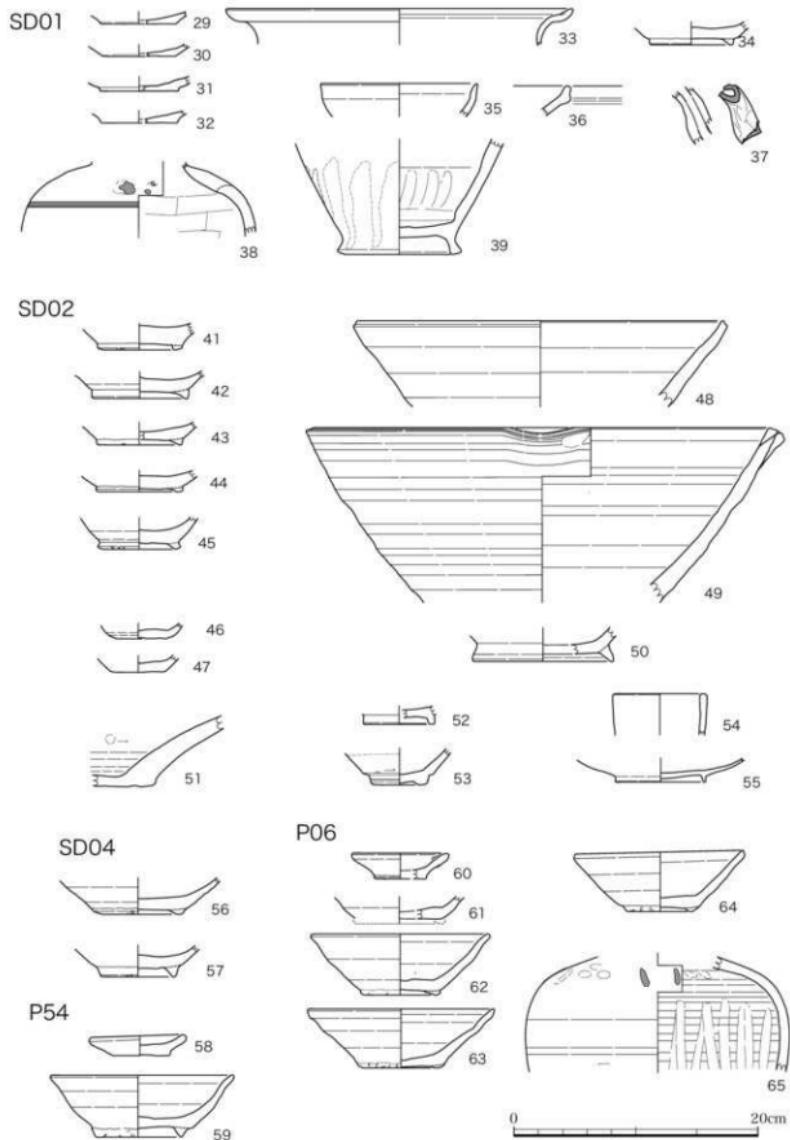


図11 中世の遺物（1）(S=1/4)

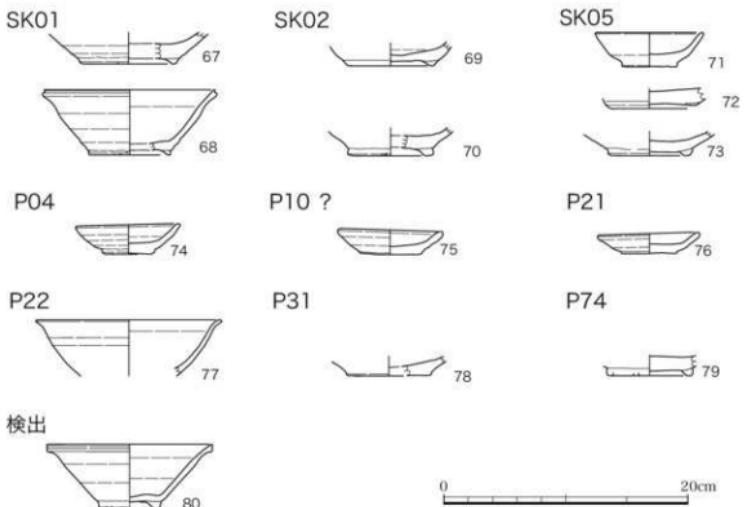


図12 中世の遺物(2) (S=1/4)

料となる。P25は拳大の川原石がピット底面にあったが、隣り合うP25a以外は石を伴わない。
その他の遺構

前記した柵列C(P70・P71)と重複関係があるP06は径80cm前後、深さ30cmの土坑。北寄りにピットの重複が集中する。遺物は遺構の底面から20cmほど上位に出土した。図12の60～65が出土した資料。ほとんどが猿投産の第6型式椀と皿。65のみ梅鉢紋の施印が認められる古瀬戸前期Ib期の四耳壺。

SD06と北辺に重複関係をもつ、SK01は南北方向(長辺)2.1m、東西方向(短辺)1.5m、深さ15cmを測る隅丸方形の土坑。調査当初は、30cm前後の川原石と焼土、炭化物が広がることから中世の火葬施設関連遺構を想定していた。ところが、調査を進めていくと、近辺から弥生土器が出土、さらに弥生竪穴建物関連の壁構がめぐった。ちょうどSK01内から出土した川原石および焼土などが、竪穴建物の中央に位置することから、これら土坑内出土資料は、竪穴建物に付属する痕跡と判断した。したがって、これら痕跡を削平してSK01が構築されたとした。つまり、火葬施設関連遺構ではないと訂正した。出土遺物は、尾張型第7型式の椀(68)と第6型式の椀(67)がある。

その他の遺物

遺構に伴う遺物はできるだけ図化した。概ね尾張型第5～7型式の椀と皿類。猿投産に若干瀬戸産が含まれるようだ。

小 結

牛寺遺跡の大半を占める中世の遺構と遺物ではあるが、遺跡の理解には情報が少ない。ここでは、溝2条とその間に柵列と想定したピット群を確認したこと、そしてこれらの遺構が豊田市教育委員会による1991年の調査成果と酷似する点を指摘しておく。





3 総 括

牛寺遺跡の調査成果について、4点を概観し総括としたい。

縄文時代中期後半の土器敷炉[†] (SK06) は、当初単独遺構として認識していた。その後、遺構埋土の状態と遺構の配置から、2ヶ所のピットを同一時期と推定した。その結果、西側調査区外へ続く建物 (SB02) に伴う炉跡であるとした。

弥生時代後期の建物 (SB01) は、調査区東壁トレンチ掘削時に壁溝を確認、調査開始当初からその存在を注目していた。しかし、中世の溝と土坑による削平などから全容が把握できなかった。そして壁溝の残存状況を手がかりに、プランを探った。その結果、6m四方の方形プランとなる竪穴建物を確認した。中世の土坑 (SK01) と重複し、明確なが跡は確認できなかった。

古代の遺構については、根石をもつ土坑が2ヶ所あり、中世の遺構群とその重複関係からその存在を推定した。SK03a～dとSK04がこれにあたる。周辺から須恵器などが出土している。牛寺庵寺に関連する遺構と断定できない。

中世の遺構は、今回の中心となる遺構群である。豊田市教育委員会の調査（1991年）と関連する遺構群は、溝とこれに並行する柵列である。今回の調査で確認した遺構群は溝2条とその間のピット群、土坑からなる。調査区東寄りの溝 (SD01) は、再掘削が確認できた。一方、調査区中央を縱断する溝 (SD02) は、川原石による石列が部分的に残存していた。溝間のピット群は、豊田市1991年調査のように、整然と列をなすものではなかった。1991年調査区の遺構群と今回の遺構群は、その配置から酷似するあり方をしている。ただし、両者とも南北方向に並列することは見て取れるが、東西方向の遺構配置が不明である。したがって、幾重にも重層した区画施設と推定できるものの、規模や性格を確定できるものではない。

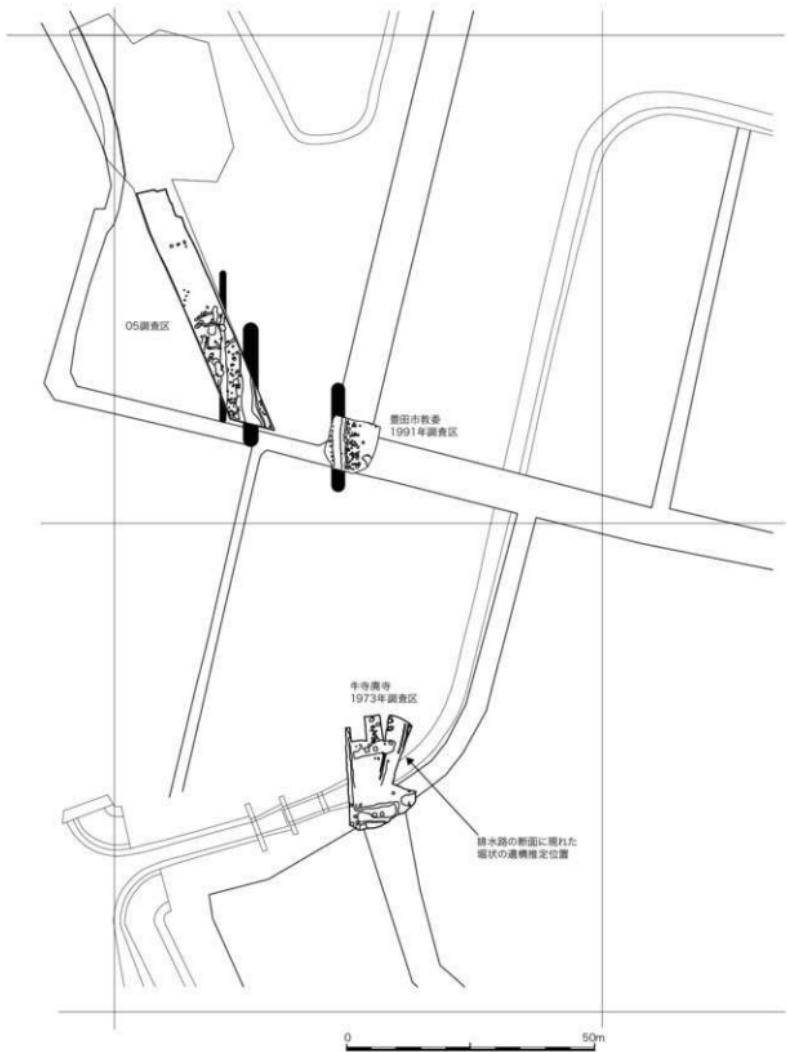


図 13 牛寺遺跡と牛寺廃寺の調査区全体図 S=1:1,000



要 約

- (1) 牛寺遺跡（豊田市御立町地内：北緯 35° 04' 25"、東経 137° 10' 17"、標高 39m 前後）は、矢作川左岸段丘低位面に位置する。
- (2) 縄文時代中期後半の土器敷か（SK06）をともなう竪穴建物（SB02）を確認した。土器は接合した結果、数個体分を使用している。すべて神明式。
- (3) 壁溝をともなう 6m 四方の方形プランの弥生時代後期の竪穴建物（SB01）を確認した。プランのほぼ中央に川原石を作らか跡を確認した。
- (4) 古代の遺構については、南方約 70m に位置する牛寺廃寺と関連する遺構が期待された。根石をもつ土坑を 2ヶ所確認した。比較的規模の大きな土坑であったが、1対として想定できるが、建物配置を考えるにはいたらない。牛寺廃寺との関連も不明である。
- (5) 中世の遺構については、豊田市教育委員会 1991 年調査区と酷似する遺構群を確認した。南北方向に延びる溝（SD01・02）とピット（樋）列は、時期と配置も含めて両調査区で共通する。ただし、東西方向の遺構群が不明なため、両者を直接結びつけることはできない。したがって、遺構群の規模や性格は不明である。
- (6) 牛寺廃寺調査区に隣接する箇所で、堀状の落ち込みが確認されている。時期としては今回の中世遺構群より若干新相ではあるが、周辺に大規模な区画を作った施設を想起させる。
- (7) 遺跡の北方約 200m に位置する古城遺跡と森城跡との関連は認められなかった。古城遺跡は中世川港的な性格が付与されている。もし、今回の遺構群（SD01・02 とピット列ほか）を関連するものとすれば、古城遺跡の方向に直線で結ぶ道路状遺構とも推定できる。ただし、古城遺跡の中世遺構のピークは牛寺遺跡と重ならない。

参考・引用文献

- 田端 勉 1978 「牛寺廃寺址」『豊田市埋蔵文化財調査集報第六集 寺院址』（豊田市郷上資料館報告一六）P1-23, 図版第 1-16, 豊田市
- 山本ひろみ編 2004 『古城遺跡』（豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 23 集）豊田市教育委員会
- 長田友也編 2006 『寺部城跡 寺部城関連遺跡 効学院文護寺跡』（豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 27 集）豊田市教育委員会
- 赤塚次郎 2001 「川原上層 I・II・III 式の設定」『川原遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集）P71-92



付編

豊田市教育委員会 1991 年調査成果

豊田市教育委員会 森 泰通

1 調査に至る経緯

平成 3 年、古代寺院として登録されている牛寺廃寺の北から東にかけて、下水道工事の照会が文化財保護課にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、かつて付近の水路断面において深さ 2m ほどの溝が確認されており、注意を要する地点であった。シールド工事（トンネル工法）のため、当初は埋蔵文化財への影響はないものと理解していたが、牛寺廃寺北側（御立町 9-62,11-57）におよそ 10m 四方の立杭を設置することが判明し、9 月 30 日（月）に掘削にあたっての立ち会いを行うこととなった。その結果、地山面において柱穴の掘り込みを確認し、土師質の土器片も出土した。文化財保護課は下水道建設課・施工業者と急連協議を行い、翌週月曜日から工事を再開することで合意し、緊急調査にとりかかった。レベルは工事施行業者の杭から起こした。方位は磁北。調査面積は 101m² である。

なお、文化財保護法に基づく手続きとしては、平成 3 年 9 月 30 日付け（文書番号：豊教管文発第 40 号）で「埋蔵文化財発掘調査の通知について」（98 条の 2）を提出し、平成 4 年 4 月 8 日付け（文書番号：3 委保記第 5-6272 号）で文化庁が受理している。

2 調査の状況

10 月 2 日（水）表土はぎ、遺構検出、遺構の 2/3 掘削完了

10 月 3 日（木）遺構完掘、清掃、写真撮影





- 10月4日(金) 遺構平面図、断面図等を作成
10月5日(土) 断面図残りと調査区配置図を作成
5日午後からは、ピットのレベル等を計測する予定であったが、翌6日まで激しい雨が降り続いたため、やむなくここで作業を断念した。

3 遺構と遺物

検出された遺構としては、溝1条、土坑1基、ピット68基がある。ピットの大部分は、溝に接続・並行しており、溝から離れた東側にはほとんど存在しなくなるため、これらは建物の柱跡ではなく、溝とセットになる塀や柵状の施設を構成する柱跡と考えられる。検出段階で確認した埋土はすべて、やや紫がかかった暗褐色土であった。なお、調査区南端付近は擾乱を受けており、遺構はすべて削平されていた。

遺物としては、各遺構から12世紀後半を中心とした土器が出土している。

塀 (SA01)

【SA01】柱穴3つを1組とする柱列となる可能性が高い。柱間は1.8~2.1mで、中央列のピットがしっかりと掘られているため、中央列が塀本体の柱、両側列が塀本体を支える前後の添柱とも考えられる。遺物としては、P6に須恵器(5・12・13)が、P28に土師皿(11)が認められるほかは、尾張型山茶碗編年第5型式(藤澤1994)を中心とする山茶碗が出土している。

柵 (SA02~05)

【SA02】柱間は2.15~2.6mと間隔が広い。遺物としては、山茶碗の口縁部(14)がある。

【SA03】柱間はやや不規則で1.5~2.2m。SA02にはほぼ並行しており、ピットの形状もSA02に似通っている。遺物としては、山茶碗(15~17)がある。

【SA04】SA01に並行し、SD01の肩に重なっている。柱間は1.35~1.9m。遺物には土師器小片などがあったが、図化不可能。

【SA05】SD01やSA02・03に並行するように見える。柱間はやや不規則で0.8~1.3m。遺物としては山茶碗(18・19)が出土している。19は尾張型山茶碗編年第3型式に遡るか。

溝 (SD01)

幅3m、深さ30cm前後の浅い溝。断面は浅いU字形であるが、東側は2段に掘り込まれている。調査区北側でやや東にカーブするようにも見える。

遺物の中心は山茶碗(33-38)で、34は尾張型山茶碗編年第6型式以降に下る資料であろう。須恵器(42-43)、瓦質土器(39)、天目茶碗(40)なども出土している。

土坑 (SK01)

1.4m×2.2m以上の略長方形。記録が不十分で詳細不明。

遺物としては、条痕文をもつ土器(47)、7世紀代の須恵器(44)、土師器甕(45)、山茶碗(46)がある。

4 まとめ

牛寺遺跡の調査は、小面積かつ限られた期間の緊急調査であったが、遺跡の状況の一端を良好に垣間見ることができた。溝とそれに並行する塀・柵の存在は、これらが何らかの区界施設であったことを示している。



溝については、昭和48年調査の牛寺廃寺の報告（田端1978）にも、排水路の断面に現れた樋状の遺構についての以下1～3の記述がある。あわせて、この地を中世の高橋氏館跡とする意見（豊田市1976）にも触れている。
1 幅一間～二間、深さ2m前後。

2 牛寺廃寺の位置する矩形の台地の中ほどをコの字形に区切る（註1）。

3 溝の中の堆積土は黒みがかった紫褐色土で、山茶碗の破片を大量に含む。

今回調査した溝は、深さが30cm前後と浅い。また、前出の報告書を見る限り、山茶碗は13世紀代を中心としており、尾張型山茶碗編年第5型式（12世紀後葉～13世紀初頭）を中心とする今回の出土遺物とは、やや時期を異にしている。したがって両者は時期差を有する別遺構と考える方が無難であろうか。

いずれにしても、これらが区界のための施設であれば、付近に遺跡本体が広がっている可能性がきわめて高い。今後の調査に期待したい。

【註】

1 筆者が田端氏の生前に聞いた話では、堀跡と考えられる範囲は、日照りが続いても柔の木が枯れなかったという。

【引用文献】

田端 勉 1978:「牛寺廃寺址」「寺院址」 豊田市埋蔵文化財調査集報第六集

豊田市 1976:『豊田市史一巻』444頁

藤澤良祐 1994:「山茶碗研究の現状と課題」「研究紀要」第3号,三重県埋蔵文化財センター

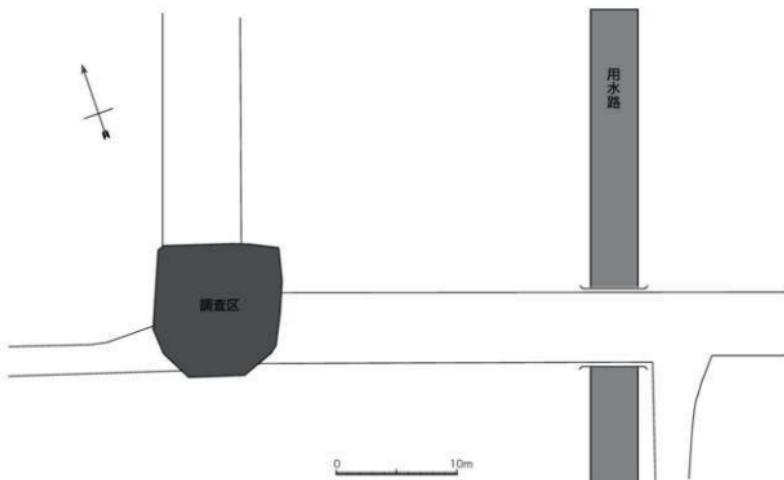


図14 豊田市教育委員会1991年度発掘調査位置図 (S=1:400)



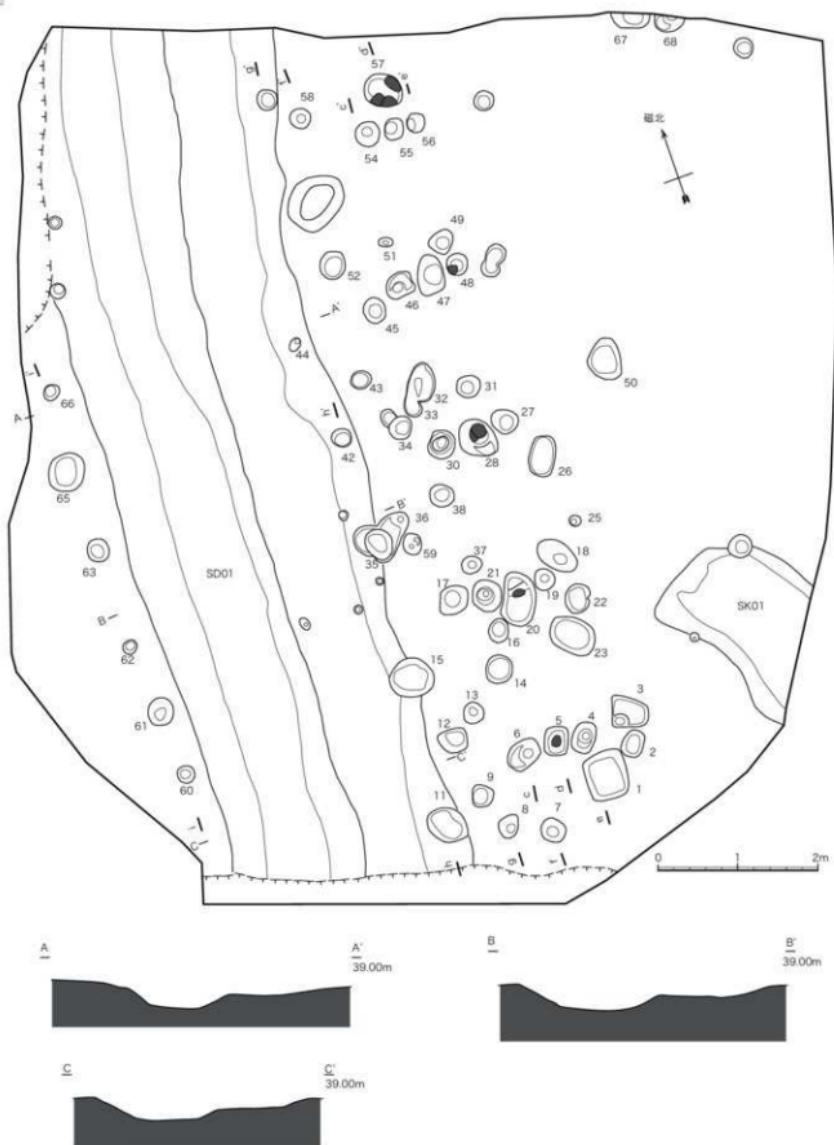


図 15 牛寺遺跡豊田市教育委員会 1991 年度調査区遺構全体図 (S=1:60)

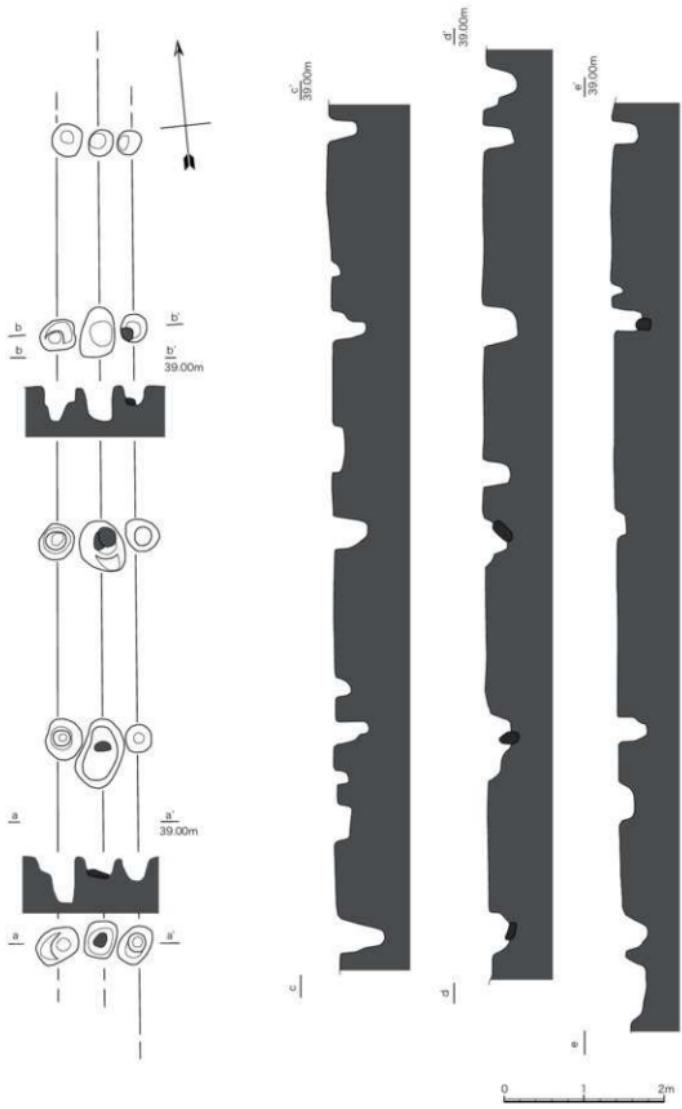


図16 SA01 平面およびエレベーション図 (S=1:60)

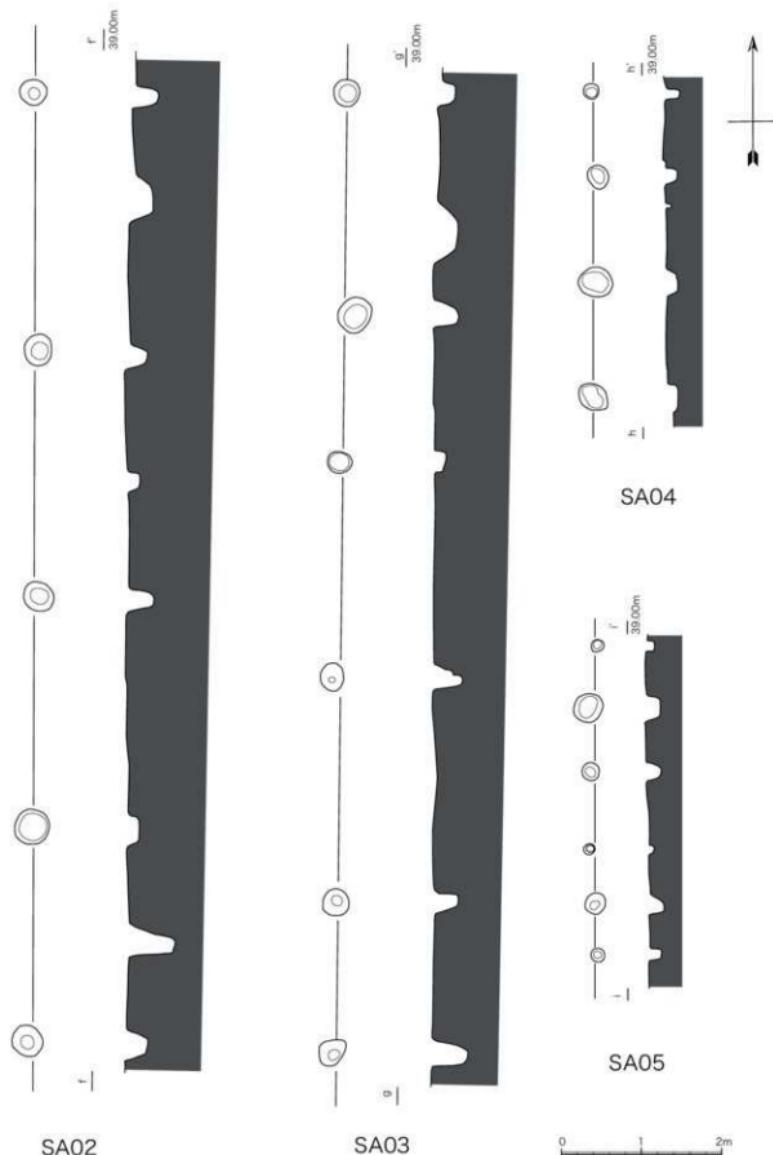
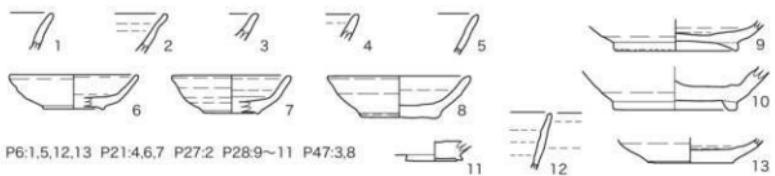


図17 SA02～SA05 平面およびエレベーション図 (S=1:60)



SA01



SA02



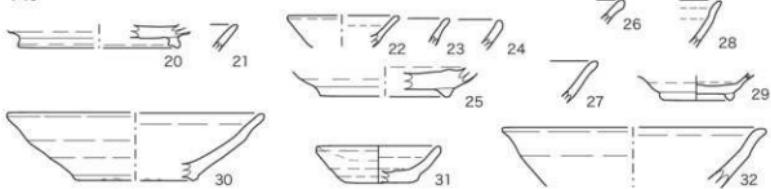
SA03



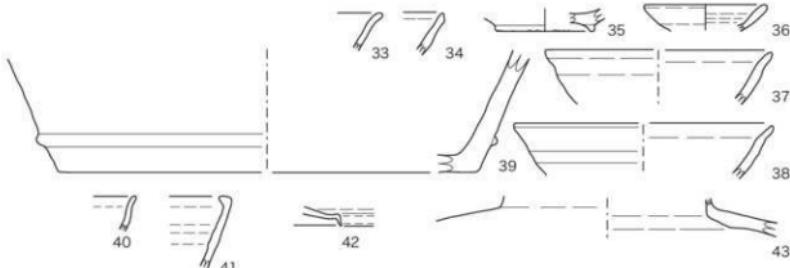
SA05



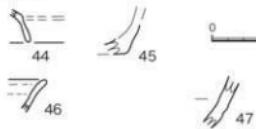
Pit



SD01



SK01



その他

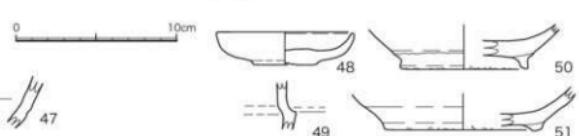


図 18 豊田市教育委員会 1991 年調査出土遺物実測図 S=1:3



表1 豊田市教委1991年調査掲載資料一覧表

遺物 No.	遺構名	ピット No.	注記 No.	種別	器種	備 考
1	SA01	P6	32	山茶碗	碗	
2	SA01	P27	12	山茶碗	碗	
3	SA01	P47	37	山茶碗	碗	
4	SA01	P21	8	山茶碗	碗	
5	SA01	P6	32	須志器	杯身	
6	SA01	P21	8	山茶碗	小皿	
7	SA01	P21	8	山茶碗	小皿	
8	SA01	P47	37	山茶碗	小皿	
9	SA01	P28	13	山茶碗	碗	
10	SA01	P28	13	山茶碗	碗	
11	SA01	P28	13	土師器	皿	
12	SA01	P6	32	須志器	杯身	
13	SA01	P6	32	須志器	碗	
14	SA02	P58	39	山茶碗	碗	
15	SA03	P52	25	山茶碗	小皿	
16	SA03	P43	22	山茶碗	碗	
17	SA03	P43	22	山茶碗	碗	高台は浮れている
18	SA05	P61	40	山茶碗	碗	
19	SA05	P61	40	山茶碗	碗	
20		P16	4	須志器	杯	
21		P16	4	山茶碗	碗	
22		P18	6	山茶碗	小皿	
23		P18	6	山茶碗	碗	
24		P18	6	山茶碗	碗	
25		P18	6	山茶碗	碗	
26		P31	15	山茶碗	碗	
27		P17	5	山茶碗	碗	
28		P49	23	山茶碗	碗	
29		P67	41	山茶碗	小皿	
30		P24	10	山茶碗	碗	
31		P51	24	山茶碗	小皿	
32		P68	42	山茶碗	碗	
33	SD01		29	山茶碗	碗	
34	SD01		29	山茶碗	碗	
35	SD01		29	山茶碗	碗	
36	SD01		43	山茶碗	小皿	
37	SD01		29	山茶碗	碗	
38	SD01		29	山茶碗	碗	
39	SD01		29	瓦質土器	火鉢?	
40	SD01		29	古窯戸	天日茶碗	
41	SD01		29	古窯戸	筒形香炉	
42	SD01		29	須志器	杯蓋	
43	SD01		29	須志器	短頭壺	
44	SK01		30	須志器	杯蓋	
45	SK01		30	土師器	平底甕	
46	SK01		30	山茶碗	碗	
47	SK01		30	圓文土器	坐相文	
48	地山検出中		45	山茶碗	小皿	
49	地山検出中		45	古窯戸	?	灰胎
50	地山検出中		45	山茶碗	碗	
51	地山検出中		45	山茶碗	碗	



牛寺遺跡から北方向を望む 遺跡から約 500m 北に豊田スタジアム



SB01・SB02 完掘状況

中世以降の削平を受け、上位部分がほとんど滅失している。弥生時代の竪穴建物（SB01）はわずかに覆土と壁溝（SD05とSD07）が確認でき、おおよその規模を把握できた。炉（SK01 南隅）はほぼ中に確認できたが、中世の土坑（SK01）と重複し、炉石と焼土の広がりから推定した。柱穴は炉と壁溝の位置関係と覆土の色調などから3ヵ所推定した。一方、縄文時代の竪穴建物（SB02）は、中世はもちろん、SB01とも重複するため、土器敷炉（SK06）および柱穴と推定した2ヵ所のピット（P35とP106）をかろうじて確認した。調査区外の北西方向への広がりも推定できるが、規模は確定できない。



縄文時代中期後半の土器敷炉（SK06）

左側の土器が集中している土坑（SK06a）が右側の樺および打製石斧とともに土坑（SK06b）を切り込む。土器敷炉は2面にわたり数個体分の土器が破碎した状態でタイルのように敷き詰められている。



縄文時代土器敷炉（SK06a）上位土器除去後
土坑の立ち上がりに合わせて、土器を敷く。



縄文時代土器敷炉 完掘状況
土器を除去すると被熱した土坑の底面がわずかに確認できた。



SB01 覆土除去前

わずかに残る覆土が確認できる。中央の土坑（SK01）は中世の遺構、その隅にある川原石は SB01 の炉石とした。



P108 遺物出土状況

SB01 にともなう柱穴の一つ。甕片と高杯（器台）が出土した。



SB01 の炉とした SK01 完掘状況（上）と炉にともなう川原石（下）

SK01 のプランは隅丸長方形であるが、川原石が3個隣接して確認できた箇所は方形に突出する。この部分が SB01 に付設する炉と考えた。いずれの石も被熱痕がほとんどない。焼土や炭化物は SK01 全体に広がって確認でき、炉にともなうものか SK01 にともなうものか判断できない。



SK04

土坑底面より 10cm 前後上位に 20 ~ 50cm 前後の礫が 11 個固まって出土。礫石下の根石か。



SK03a ~ c

SK04 と同様に礫が根石状に固まって出土 (SK03c)。土坑は奥の a から手前左 c にの順序で掘削されている。



中世遺構を中心とする全景写真

写真中央の溝はほぼ南北方向に伸びている。溝間のピット群はほぼ溝に沿っている、柵列と考えられる。



上：SD01 の断面（図 10）写真

右側の小溝（a）が左側の大溝（b）を切り込む。

中：SD01 の断面（調査区南壁）写真

溝の両肩にテラス状の稜線がみえる。左側は小溝（a）、右側は未確定ながら小溝が存在するか。

下：SD01b の底面にあった炭化物および骨片

約 60cm 四方に広がっていた、骨の種別は不明。



上：SD02 全景南から

ほぼ南北方向に延びる溝。溝の肩に沿って、拳大の川原石が部分的に縱列。石列は東寄りのみに確認。

中：SD02 断面

下：調査区東壁付近

SD02 に SK05 が切り込む。SK05 は不定形ながら 50cm 以上の深さ。



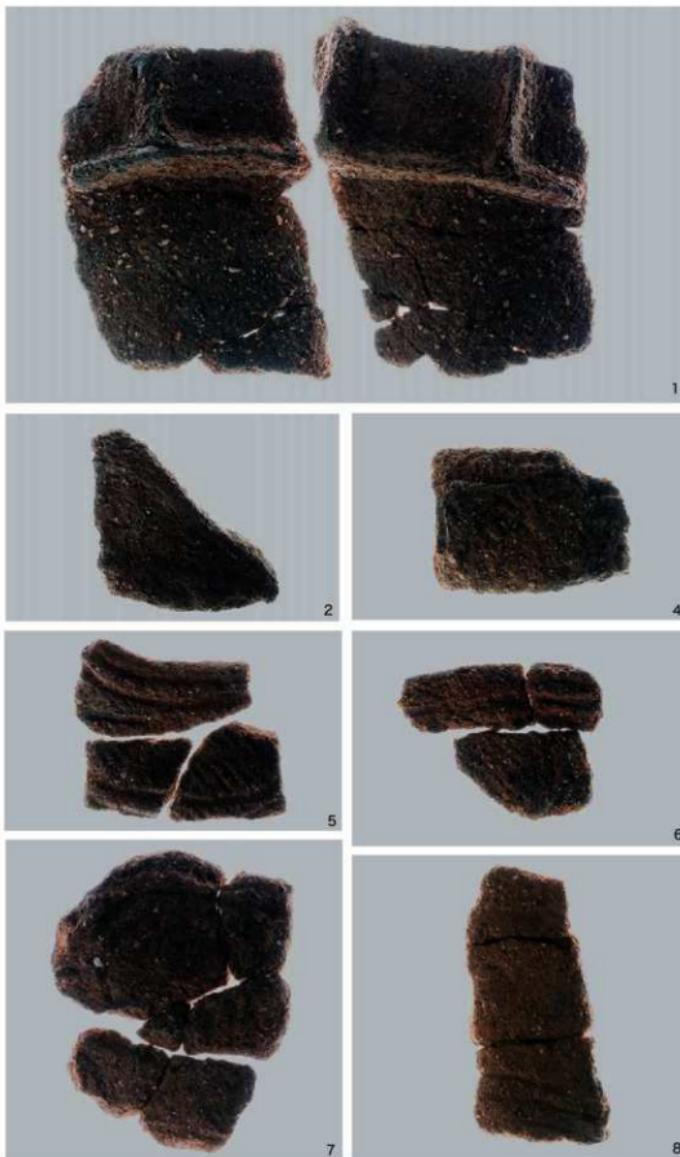
P06 および隣接ピット出土状況

遺物はすべて P06 出土。土層観察の結果、P06 が P71 と P70 を削平。写真にある陶器は、尾張第6型式の山茶碗。その他、古瀬戸前期の四耳壺などが出土。ピットに遺物がまとまって出土した数少ない遺構。



上:SK01 完掘状況 下:SK01 堆積状況

SK01 内から出土した 30cm 前後川原石は SB01 の炉石と判断した。ただし、周辺に広がる炭化物や焼土は、SB01 の炉に関連するものばかりではない。土坑のほぼ全面にわたってひろがる炭化物と焼土は、SK01 に関連するものと重複している可能性が高い。ただし、調査当初想定していた火葬施設の条件は出土遺物や土坑の形態などから満たされなかつた。





11



13



14



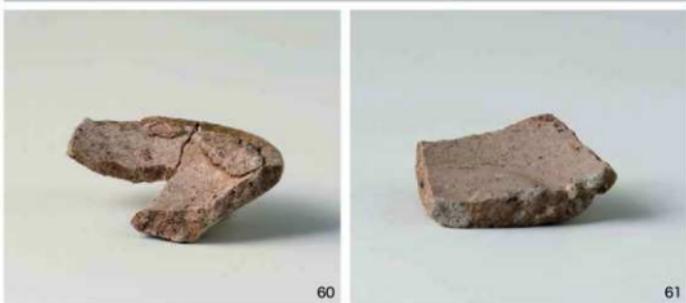
17



左から 39,37,38



40

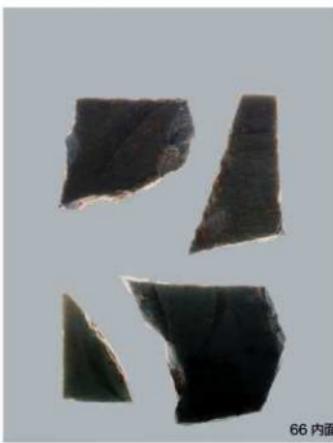


60

61



62



報告書抄録

ふりがな	ごでらいせき
書名	牛寺遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第155集
編著者名	永井宏幸・森 泰道
編集機関	財團法人愛知県教育・スポーツ振興財團愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県豊富市前ヶ須町野方802番24 TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごでらいせき 牛寺遺跡	あいちけん 豊田市 みたちちょう 御立町	23211	630359	35度 04分 25秒	137度 10分 17秒	2005.6.～ 2005.7.	1,300	矢作川 野見地区 改修事業

所収遺跡名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
牛寺遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古 代 中 世	炉 竪穴建物 土坑 区画溝	土器・打製石斧 土器 土器 陶磁器・土器	縄文時代中期神明式 の土器數がを確認。 中世区画溝は既調査 の溝と関連する。

文 書 番 号	発掘届出(16理セ第114号 2005.3.14) 通知(16教生第2156号 2005.3.23) 終了届・保管証・発見届(17埋セ第34号 2005.8.2) 監査結果通知(教教財第592号 2005.9.30)
---------	---

要 約	本遺跡は、矢作川左岸、山付堤付近に位置する。縄文時代中期、弥生時代後期の竪穴建物はいずれも中世以降の削平により一部残存するに留まつた。周辺の遺跡から数種で形成された集落の可能性が高い。 古代「牛寺廃寺」の北側に隣接した今回の調査は、古代寺院に関連する遺構が期待されたが、遺物も含めて稀少な結果となった。 1991年調査で明らかになった中世の溝と柱穴列は、今回の調査でも確認できた。中世の居館あるいは寺社関連の施設に関連した区画と推定できる。
-----	--